

アクセサリーから見た縄文時代～石製装身具の様相～

五十嵐 睦（平塚市教育委員会）

1 アクセサリーとは

「アクセサリー」と聞くと、ネックレスや指輪、イヤリングなどを思い浮かべることができます。現代の私たちにとっても、身近なものである「アクセサリー」は、人類史の中でどのような位置づけだったのでしょうか。ここでは、縄文時代を中心に「アクセサリー」について、考えてみたいと思います。

まずは、現代において一般的に「アクセサリー」が何を意味しているのか、広辞苑を引いてみます（新村出編 2018）。

アクセサリー【accessory】①衣服の付属品。ベルト、ブローチ・ネックレスなど服装をひきたたせるための装身具。広義には帽子・靴なども含む。

②機械類の付属品。周辺機器。

ここで扱う「アクセサリー」は①の意味で用いられる用語です。では、この説明の中にも出てくる「装身具」はどうでしょう。

そうしんぐ【装身具】装飾のために身につける工芸品。くし・かんざし・首飾り・カフスボタン・ネクタイピン・指輪などの類。アクセサリー。

いずれも同義に用いられる用語ですが、「装身具」はより工芸品という意味合いが強いようです。

今回は、副題に「石製装身具」と付したとおり、縄文時代に石を素材として作られた装身具を主に扱います。

2 人類はいつからアクセサリーを身につけたのか

人類の起源にはいくつかの立場があります。チンパンジーの祖先と人類の祖先が分岐したのは約 700 万年前とされています。ホモ属の誕生をもって人類の起源とする立場では、200～250 万年前。最古のホモ・サピエンスが登場したのは、化石人骨から 30 万～20 万年前のアフリカと考えられています。ホモ・サピエンスは、約 6 万年前に本格的に世界に展開します。この時点では、ネアンデルタール人やデニソワ人といった人類も存在しており、それぞれの間で交雑も確認されています（篠田 2022）。

最古級と考えられるアクセサリーは、貝殻製のビーズで、12 万年前近くにさかのぼります。「レヴァント地方（地中海東部沿岸地方）」のスフル洞窟から二点の巻貝、そしてイベ

リア半島南部のアヴィオネス洞窟から三点の二枚貝が報告され」ています（池谷編 2020）。スフル洞窟では、埋葬痕跡の様相からホモ・サピエンスによるものと考えられています。アヴィオネス洞窟例は、当時ヨーロッパの遺跡に伴う人骨はネアンデルタール人のみのため、彼らによるものと考えられます。10～7万年前は、アフリカでの発見例が多く、多くはホモ・サピエンスによるものと考えられています。その後、発見例の希薄な時期を経て、45,000 年前以降、貝殻だけでなく石や象牙、骨など多様な素材によるアクセサリーが出現します（門脇 2020）。

日本列島における最古級のアクセサリーは、後期旧石器時代にあたる 3～2 万年前に、北海道で発見されたものです。美利河 I 遺跡、湯の里 4 遺跡、柏台 1 遺跡で、かんらん岩などを素材に作られた石製装身具が出土しています。

3 縄文時代のアクセサリー

16,000 年前頃に日本列島に土器が登場します。気候変動により、時代は旧石器時代から縄文時代へ移行します。10,000 年以上続く縄文時代の中で、さまざまなアクセサリーが登場します。その素材も様々で、土製、石製、貝製、骨角製、木製、化石（琥珀）製と多様です。ここで取り扱う「石製装身具」は、石を素材としたアクセサリーです。石製装身具は、石を「割る（剥離）」技術に加え、「たたく（敲打）」「みがく（研磨）」「孔をあける（穿孔）」「すり切る（擦切）」などの技術が成熟することで、多様な展開をみせるものと考えます。これらには、素材となる石の硬さに比例して、多くの作業時間が必要となります。こうした作業時間の確保は、縄文時代に安定した定住生活に移行したことで獲得されたものと考えられます。

縄文時代草創期～早期の装身具として、愛媛県上黒岩遺跡から出土した貝製・骨角製・石製の装身具があげられます。その後縄文時代早期末葉になると、石製装身具のバリエーションが増加します。ここからは、いくつかの特定の装身具に着目して、縄文時代の石製装身具について考えてみたいと思います。具体的には、（1）玦飾（玦状耳飾）、（2）ヘラ状石製品、（3）ヒスイ製品を取り上げます。

（1）玦飾（玦状耳飾）

玦飾（玦状耳飾）は、縄文時代早期末葉に登場し、前期には全国的に盛行する石製装身具です。大阪府の国府遺跡において、土坑内から人骨の両耳付近に出土したことにより、耳飾りとしての用途が推定され、中国から出土する玉器「玦」に似た形状のため、こうした名称がつけられています。一般的には「玦状耳飾」で説明されることが多い遺物ですが、近年、耳飾りという用途だけでは説明できない出土状況が増えてきたことや、研究対象地域が列島を越えて東アジア地域に広がっていることから、国際的に共通する用語で議論を行うため「玦飾」という用語も使われており、筆者は後者を用いています。

ここでは、神奈川県指定文化財に指定されている海老名市の上浜田遺跡から出土した3対6点の玦飾を取り上げてみます。上浜田遺跡は、神奈川県海老名市に所在し、座間丘陵の南端に位置し、二つの谷戸にはさまれ、主要な尾根から分岐して南へのびる小舌状台地上に立地しています。玦飾が出土した調査は、土地区画整理事業に伴い神奈川県教育委員会により昭和47～49年にかけて実施されました。ほぼ横並びに検出された3基の、平面プランが楕円形を呈する土坑（SK4～6）から、玦飾が1対ずつ出土しています。こうした検出の状況と、各土坑が切り合い関係にないことから、各土坑が各々意識されて構築されたと考えてよいでしょう。時期は、縄文時代早期末葉とされています。

上浜田遺跡の玦飾の特徴は、対となる資料の石材が同一あるいは非常に類似している点にあります。このことは、それぞれがセットとして認識されて作られたことを示しています。この石材の問題については、まだ研究の途上にあり、今後の展開が望まれます。

また、これらの玦飾をよく観察すると、完全な形で出土しているものと、何度も修理をされたものがあるといった様相が伺えます。ここで、土坑の一つSK5から出土した玦飾を例に、修理をして使われ続けた様子を追ってみます。

SK5出土の玦飾D。滑石製の玦飾。色調は飴色（茶色）で、琅玕質（透明感のある状態）を呈しています。中央孔は、作出痕跡が見えないほど摩耗。切り目作出は、幅・痕跡から擦切技術によらないものとみられます。小さく穿たれた穴は計9孔。切り目付近に2孔、両方向穿孔で、いずれも補修を意図したものではありません。この資料には割れ口が3か所あり、切り目と遠い位置の破損箇所から順に、1か所目には一方向穿孔で補修を意図して2孔、2か所目には一方向穿孔で補修を意図して3孔、3か所目には未貫通で2孔という内訳となります。1か所目の穿孔は、2孔とも開始孔径と終了孔径にほぼ差がなく断面筒形を示すのに対し、2か所目の穿孔は、開始孔径と終了孔径との間に差があり（もっとも差の大きい孔で、開始5mm、終了0.5mm）、断面V字形を呈します。このことは、1か所目と2か所目とで、穿孔方法が異なることを示しており、これらの破損が同時ではなく、時間差があり、補修の担い手が異なっていた可能性があります。なお、2か所目には3孔施されていますが、穿孔方法や位置関係から、一連の補修に関するものと解釈しました。1・2か所目とは異なり、3か所目の未貫通の2孔は、未貫通であるがゆえに補修の役割を全うしていません。にもかかわらず、出土状況として、概ね全ての破片が揃っており、接合して完形となります。これは、最終的に穿孔同士を紐でつなぐ補修方法とは別の方法をとったか、あるいは破損したまま廃棄（副葬）されたかのいずれかが考えられます。前者であれば何らかの接着剤による接合、あるいは紐等による結束といった可能性が考えられます。後者の場合は、被葬者に装着しての埋納は困難でしょうから、添え置かれたものと考えられます。SK5の玦飾出土状況は、他の2つの土坑と大きく差はありません。添え置かれたとすれば耳部付近と推定されます。出土状況について、資料の観察と報告書記載からは、これ以上迫ることはできませんでした。いずれにしても、破損と修復を繰り返した時間的経過が見て取れる資料と

いえます。

現在、玦飾の初源は中国東北部に求められており、国内では、福井県桑野遺跡がその受容の初期に近い事例と考えられています。その後あまり時期を違えず、上浜田遺跡の出土例をみます。国内における玦飾の初期の受容は、縄文時代早期後半に求められますが、その後どのような経緯で国内に分布していったのか、その過程を考えるために、上浜田遺跡の事例は重要と言えるでしょう。

(2) ヘラ状垂飾

ヘラ状垂飾については、すでに研究史および関東・中部地方の様相について坪田弘子氏により詳しくまとめられています(坪田 2017)。ここでは、観察をとおして得られた所見を中心に、その使用方法を考えてみたいと思います。

坪田氏が、縄文時代前期後葉～中期初頭に位置づけたヘラ状垂飾に最大長 10 cm を超える大形で蛇紋岩製の一群があります。今回は、神奈川県内出土の資料と比較のため群馬県内出土資料を取り上げます。神奈川県では、横浜市石原遺跡、川崎市山口台遺跡、藤沢市遠藤広谷遺跡、群馬県では高崎市三ツ子沢中遺跡、渋川市三原田城遺跡の計 5 点となります。石原遺跡以外は、土坑からの出土です。

これらのヘラ状垂飾には、垂下を目的としたと考えられる孔が上部に穿孔されています。これら 5 点には、共通して穿孔部に特徴的な使用痕跡が見られました。それは、斜め 45 度に近い摩耗痕跡で、表裏ともに観察できます。

垂飾の中で垂下に伴って形成された使用痕跡は、多くの場合、穿孔部の上方に紐がすれたような痕跡で観察されます。これは、紐にとおして、石製装身具を垂下げた場合に、重量のある側が下方に位置し、その反対方向に紐が当たるためと考えられます。一方、今回の資料については、重量のある側が下方に位置した場合、その反対方向である上方には痕跡がつかず、斜め 45 度の方向に使用痕跡が形成されていました。摩耗の度合いからは、紐のような軟質素材がとおされていたことが推察されます。

このことから、当該資料群は、ある程度紐をピンと張った状態で垂下され、資料そのものの重みで垂れ下がった角度で痕跡が形成されたものと考えました。しかも、痕跡は両面にみられることから、何かに密着した状態で用いられていたことが推察されます。

これらのことから、この資料群は、腰飾りとして比較的日常的に使用されたものと考えました。また、この資料群の素材となった蛇紋岩は搬入石材として位置づけられており、容易に入手できるものではなかったものと考えられ、土坑出土が多い状況からは、特定の個人に帰属するものであったと推察されます。

10 cm を超える蛇紋岩製ヘラ状垂飾を腰飾りとして日常的に使用している様相は、何らかの標章として機能していたものと考えられます。今後は、同様の資料の分布について、その使用の在り方も含め検討が必要と言えます。

(3) ヒスイ製品

縄文時代の石製装身具の中で、もっとも有名なのがヒスイ製品でしょう。かながわの遺跡展『縄文ムラの繁栄』でも、神奈川県内から出土したヒスイ製品が数多く展示されています。ヒスイ製品の特徴は、その素材であるヒスイが現代においても宝石として扱われていること、そして何よりもその原産地が新潟県糸魚川地域に限定される点にあります。実際には、ヒスイ原産地は日本列島に複数存在しています。ですが、装身具の素材として選択されるヒスイは概ね糸魚川産に限定されることが自然科学分析により明らかとなっています。こうした分析結果から、縄文時代において、糸魚川産のヒスイが極めて遠方にまで分布することが明らかとなっています。そのため、縄文時代のネットワークを知る手掛かりとしてヒスイは重要な位置を占めています。

ヒスイは、モース硬度 6.5~7 という硬さで、非常に加工の困難な石材です。当時、加工には相当な時間を要したと考えられています。単に砥石で研磨すれば思い通りの形になるわけではなく、コツコツとキツツキがつつくように力を調整しながら敲き、ある程度の形となったところで磨き上げていきます。また、紐をとおしたと考えられる穴についても、その穿孔は容易ではありません。現在考えられている方法は、竹や木の棒などを錐とし、ヒスイ以上の硬度をもつ媒材を用いて回転穿孔するというものです。一つの製品を仕上げるのには、非常に長い時間がかかったものと考えられます。

ここでは、神奈川県内から出土したヒスイ製品 2 例に着目して、ヒスイを巡る研究の現状を紹介したいと思います。

まず 1 例目は、秦野市東開戸遺跡から出土したヒスイ製大珠です。この遺跡からは、琥珀製大珠も出土しています。ヒスイは、新潟県糸魚川産。琥珀は、千葉県銚子産とみられます。こうした一つのムラにおいて、ヒスイ製品と琥珀製品が併せて出土する事例は、他地域にもみることができ、注目されています (栗島 2012b)。さて、このヒスイ製大珠は、隅丸の直方体に仕上げられた後、縦方向に穿孔が施されています。一般的によく紹介される縦長鏢節型の大珠と比べると形態や穿孔の方法が異なるようです。神奈川県内には、こうした長軸方向に穿孔するヒスイ製品が比較的多くみられます。

2 例目は、平塚市原口遺跡から出土したヒスイ製品です。遺構に伴っていないことから詳細な時期は不明です。このヒスイ製品の特徴は、何よりも非常に透明度が高く、美麗であることです。自然科学分析により糸魚川産のヒスイであることがわかっていますが、他の遺跡から出土したヒスイ製品とは、見た目が大きく異なります。このヒスイ製品には紐をとおしたとみられる穴が穿たれていますが、それとは別に側面にも穴の「痕跡」が残されています。おそらく、本来はより大きな垂飾であったものが割れたか、意図的に割った後、磨き上げて穿孔し、現在の形の垂飾に作り直したものと考えられます。実は、ヒスイ製品を意図的に分割する様相は、数は少ないものの日本各地で確認されています。縄文時代の社会において、

希少なヒスイ製品を分割し、さらに分有することに社会的意味があったものと考えられます。

4 まとめ

今回ご紹介した石製装身具は、縄文時代のアクセサリーの中の一部です。また、今回は石製装身具の中でも、資料の観察をとおして、その作り方や使い方を類推することに焦点をあてました。博物館などで資料を見るときに、今回ご紹介したような視点で見ると、これまでとは違った印象を受けられるかもしれません。そうした中で、資料を見て、気づく面白さを知っていただければ幸いです。

【参考・引用文献】

- 五十嵐陸 2025「縄文時代早期～前期の石製装身具」『シンポジウム装身具研究の現状・課題』
科学研究費研究基盤(B)「ヒスイ・琥珀を用いた装身具の総合的研究」(研究課題 20K0180:
研究代表 栗島義明)
- 池谷和信編 2020『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』昭和堂
- 門脇誠二 2020「人類最古のビーズ利用とホモ・サピエンス」『ビーズでたどるホモ・サピエ
ンス史』昭和堂 23-36 頁
- 神奈川県教育委員会編 1979『神奈川県埋蔵文化財調査報告 15 上浜田遺跡 本文編』
- 栗島義明 2012a「ヒスイ製大珠の分割～その技術的方法と社会的意義を考える～」『縄文時
代のヒスイ大珠を巡る研究』
- 栗島義明 2012b「コハク製大珠の広域分布～ヒスイ大珠との相違と相似～」『縄文時代のヒ
スイ大珠を巡る研究』
- 篠田謙一 2022『人類の起源』中公新書
- 大工原豊ほか編 2020『考古調査ハンドブック 20 縄文石器提要』ニューサイエンス社
- 鄧聰 2004「東アジアのケツ飾の起源と拡散」『環日本海の玉文化の始源と展開』
- 坪田弘子 2012「神奈川県出土の大珠とヒスイ製品～縄文時代中期から後期にかけての様相
～」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』
- 坪田弘子 2017「縄文時代のへら状垂飾－関東・中部地方の事例を中心に－」『神奈川を掘る
II』玉川文化財研究所
- 新村 出編 2018『広辞苑 第七版』岩波書店
- 春成秀爾ほか 2009『国立歴史民俗博物館研究報告第 154 集 愛媛県上黒岩遺跡の研究』
- 藤田富士夫 1992『玉とヒスイ～環日本海の交流をめぐって～』同朋社出版

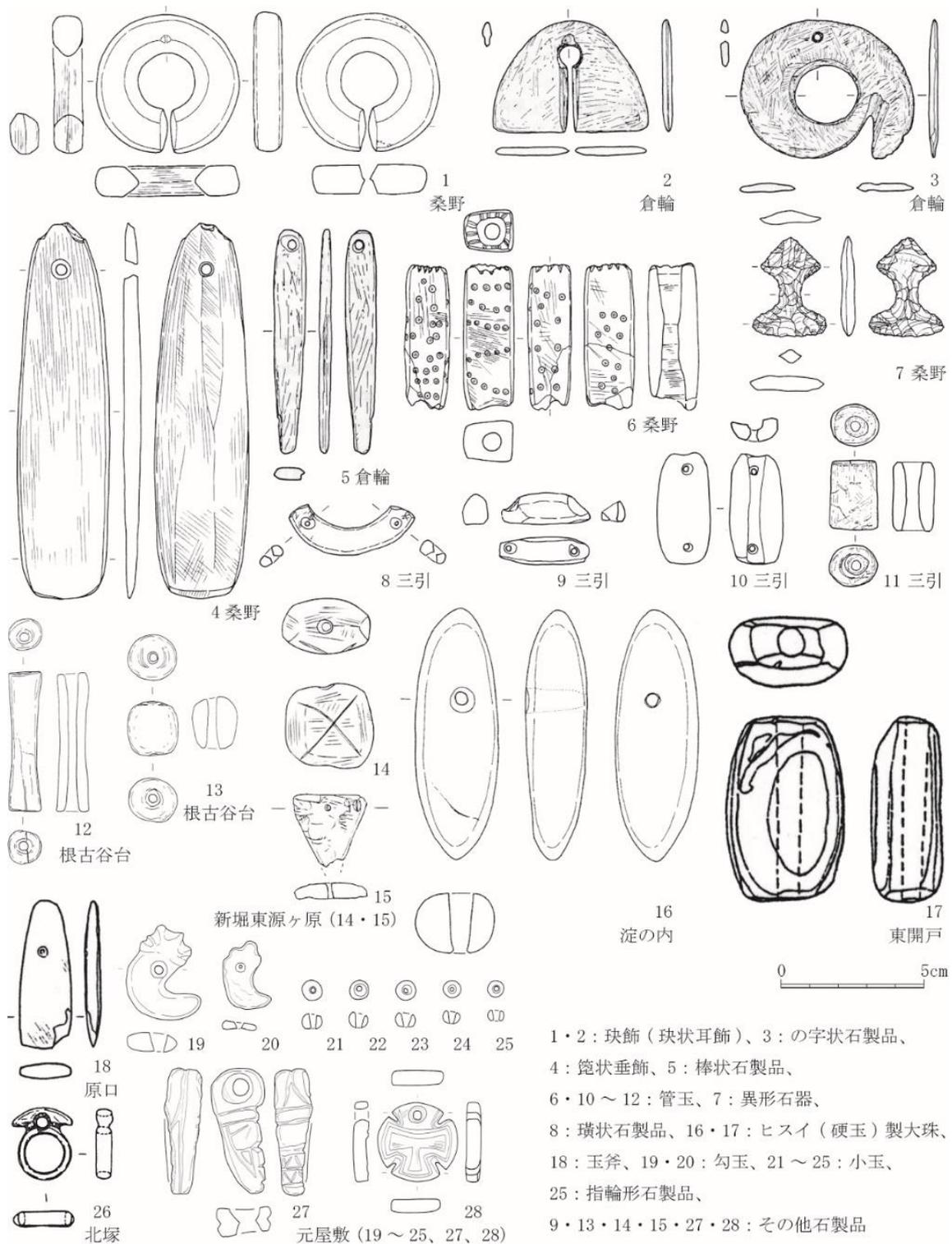


図 縄文時代の石製装身具

図1（大工原豊ほか編 2020 を一部改変）

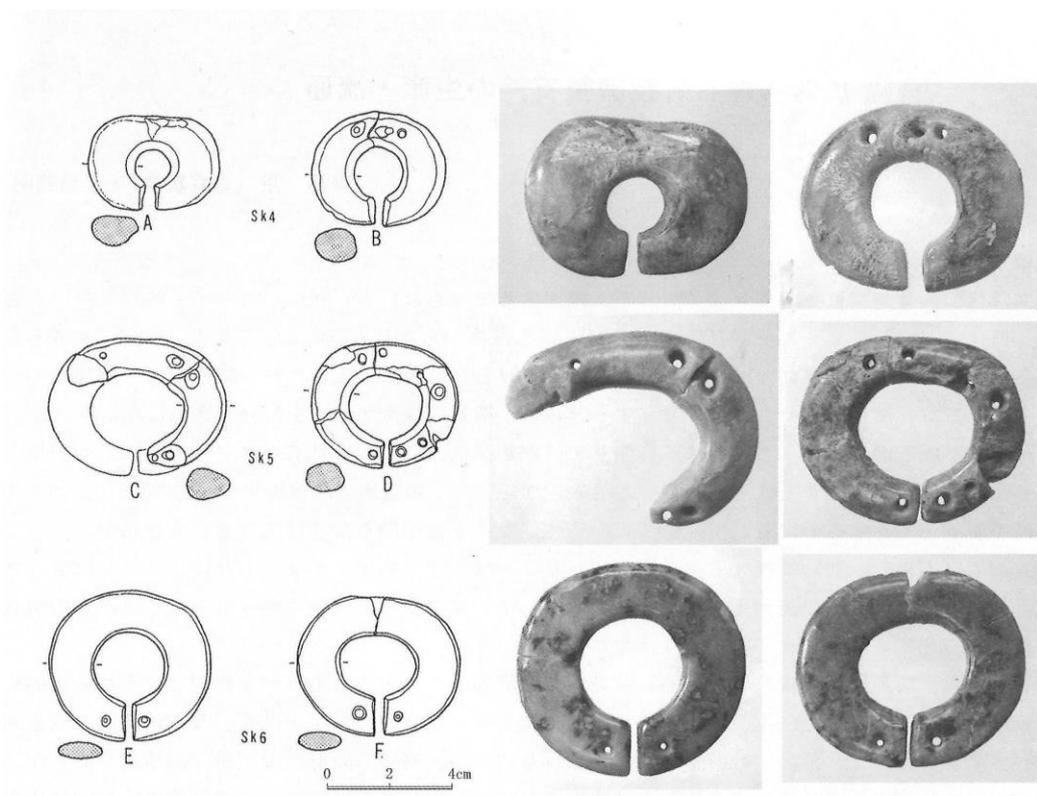


図1 上浜田遺跡出土珧飾

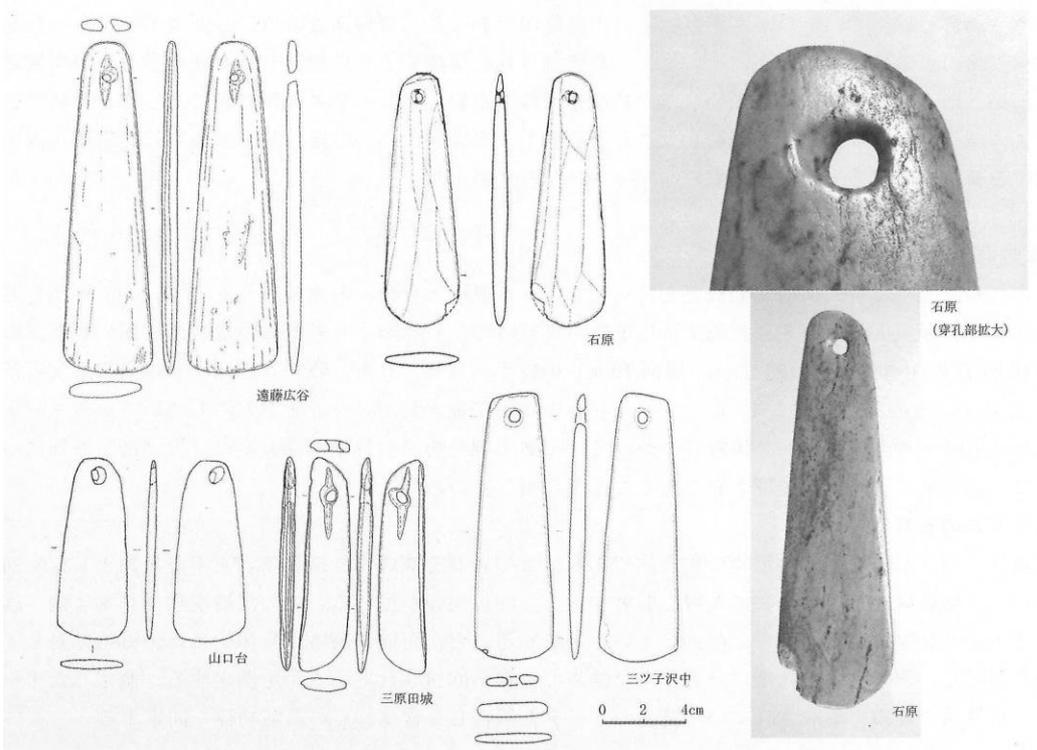


図2 ヘラ状垂飾

図4 (五十嵐睦 2025 より引用)

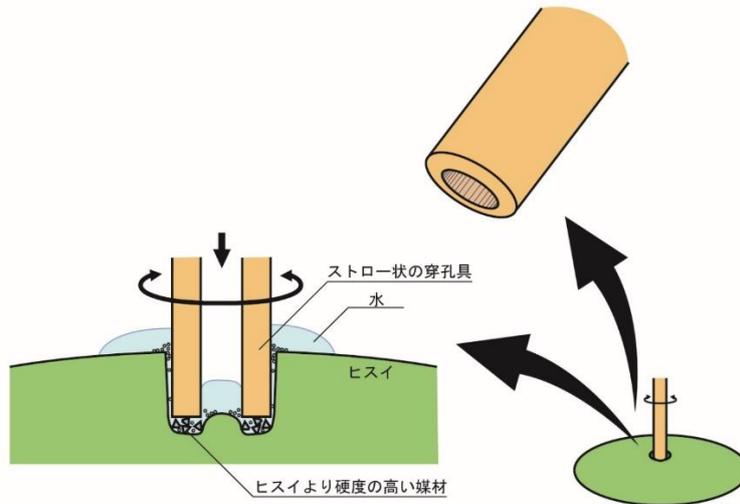


図5 (筆者作成)



図6 神奈川県内のヒスイ分布 (坪田 2012 より引用)